流露する。

知れぬ悲嘆の裡にも

務を果さねばならぬ。

〇回

井

重

兵.

德

高

胍

△敬親措かざる讀者諸君…

君の大多数は明治、大正

和の三時代かけて『世界

榮とし、愈ゝ益ゝ報國の聖

する事を、最大至高の光

かしる非常の秋、

遺憾なく

しては、

真正日本人たる純情は

おれらは、

も草も木も鈍色の装ひ

世の常ならぬ天地諒節柄、

主

田

山雨

創

者であるからには、日蓮

の塵』と

つた勇者である。すでに日本』建設のため健闘し

を精進せねばならぬ。

| 燦然として天空に懸って居に 被する昭和二年の麗陽は、

罐

類

東

一野車坂

電話下谷五七一二番

飲 禮。 越銀行頭取 中 野

淺

之

助

俊

源

造

正

郎 雄

元

治

めて、しめやかに、つくし年有餘經營しを抱いて、無量の感傷を秘文學事業の一 れらは、日本人として生以て諸賢の厚志に報じ、 仰げば「若き日本」を光歩みの樣に文字を書き認め 深刻なる哀感郷人諸賢、 ら」の賛援者諸賢の理解あ改革創新を思ひ立つた。「じを抱く。」「たひ自己の人格、生活、事業の境にピタリと觸れる様な感 ◎しめやかに、つくしみ深◎ 何れの時諸賢の賛援に報 情を棒ぐる次第である何を る而も熱切なる御賛援に對 年有餘經營して來た個人リ 紙の四角な枠の 五年とはなつた。 かと深觀内省してやまね。 らしながらも 文筆勞働生活の追憶は、ナカ してより春風秋雨、 サラ敬親やまね、 満三年有餘の郷土生活ー 諒闇の春を迎へる。 今、私は此のペンを走 顧すれば、 年頭の賀詞遠慮申すかり 涙含ましきも 衷心より感謝の至 節、一 初 が故に無量の 部として滿一 取り分け私の 言にして云 放山に歸來 章と蝸牛の 無量の感慨 故山の 原稿用 足掛けの のがあ 一字 時 又なる改革を企つべき乎?私窓を欝して滿八年有餘の社 を宥され を飾る盛春の秋、 の腹は既に決定して居る。 ひら」の改革である。 松ヶ岡公園山頭 た自分を顧み感無量である 萬里の波濤を 自己改造を發心したい、がしかし、今のわが心「懷疑」生活の結論として凡俗われらの知るよしもな 選はく 所謂立身、 離れ難く、 年有餘經營して來た『た州有餘年の人生に一 先づその第一着手として 里の波濤を蹶らんと發心して「天地化育の一度は千里の長風に駕し」きながらへて來た の彼岸より た自分も、 端は現實化する。 棒ぐ」の素心、初一念 文を 12 自分は半歳に亘るをものした俳聖の心境は、 終りに郷人各位 出世、成切を郷 多くの舊學友の 生れふるさい。 しばらく是 觀望して 私の理想つた半生の過去ではあるが櫻花萬朶(餘り愉快な日を持たなか 過ぎるない 「郷れつく生きやうとも、 心して 年の文筆勞働生活に 會的生活に 人は唯「生きる 得してやまない。 感謝せねばならぬ しく生き、恵まれず虚げら しかし、 求してやまね一事は 俳聖芭蕉の名吟に 自分は一 しかしながら たとへ、 宿かる頃や藤の花草臥れて ふ一句がある。 生第一義的聖願 たいい 定新科告廣 所行發 印 侧 切に草臥れた、 貧しく生き、 かうして生 思寵を感 事實に對 回 斯の 節に願 事實に である 滿五 七日日 吾れ 學 釜 元 元 椞 農 縣 磐城銀行專務取締役 年 磐 屋 I 銀 代 商 城 銀 諸 植 行 安 白 賀 議 小 大 占 中 店 行 頭 竹 學 主 島 橋 士 頭 崎 取 員 井 村 校 取 源 重 久 長 與 睦 博 太 太 Ξ \equiv 郞 郎 郎 鳳 之 鄍 治 專 久之濱商事⁴ 磐城實行專務取締 東所部電 堀江工業株式會社 社小 田 好間軌道株式會 內鄉村々會議 好 小長機株式會長 間 表 長 長 田 田 江 村 Щ 青 加 四 大 木 崎 館 П 役 平營業所 辰 佐 貴 社 甲 忠 精 \equiv 又 丈 市 藏 鄍 次 鳳 鳳 醫 學 士 出 士 計 江 江 湯本町區會議員 工 小名濱水產試驗場長 名 名 祭商 窪 中 吉 比 飛塚 松 町 MJ. 亦 R 藤 佐 田 Щ 會

號 第 け道も宙瞬でを応いる。 續落あ進 くちつむ 感にその不 謝深こ汗平 せきにをを のとさ人天 に天 思强知神 ち勝自 相知無 力置再 をかび ふひれな 。なぬら にた己 くきれ間地 進地 由福平 萬似情我 板珠鑛山 永たてに 完のぬにの むの 陷うあ 人た意精 献れ天 も感不 姿をご 遠哲容は 幸る圓進 るとつ るみでの息 B ON ね因自流轉 全現とは健 早を滿 げた地 金製品、 用 °外は現ま の學想目 ば縁己せじなを偽って へ實き不動 の焦て 福|滿の ぬけ人 く味を 誠るの 諸 そ姿と すなれぬ 日者で標 oれ間 と曝の平に は燥他 健ひ淨 意立健 の一の裡 機 度量衡器、農工具 進露空が不 標がはを 誠場動心にに ら省瞞不愛ぬみと平の こいで天 設つ化 鍵が活に 心どか 自るあ 椒 偉と °は地 暴勝る をあなみ は現動は 的不ら むの虚あ平 間し ∇ せいし 大な慥なのなくかい健 銅 追ついつ こよ自不源 と。己滿泉 と字 ら 或 實はにい 精於想 向平全 自利を 道悲かりは ス 求た ^Cめ なれるでした。 程哀ら不無のか起滿い 鐵 し宙 進てひ 上よ然 棄萬知 ⊐ し。天ね る大なか動 材 ん共こ す職を TU) はり不 の不辯あを 的能ら 進卒のば 惱らりが。 哉調實 Gは こにれ を生を の心 あ平護ら培 常感平 不論ぬ る業馳 宇和在 永宙ので 久 む漠星な 平者利 理を まどのばへ。 み生 か只 にあ間不 よにせ に謝不 でする。路ではる。は不無 のたにら 想のと 不の己 祈き超 あらら平 り對る 行及 *i*! の裡あどに がるのね りうし不満 にろはく不 多か下そ満 り共越 他しと 懸不を 滿共主 ∄ 盟 人容み 姿して 姿にりの理 のに義 てにし に同き け満去 物 鍋 車實一想 間想氣 己榮で き不さのを 墓知者穴らか る共理平我 信 姿の 道胞吾 ねよれ 友 w 套 輸行分の のをを目 に滿れ原轉 磐城釘 まに想は三 はー ばりと まゆ なに等 類 ので一追 道捨取標 驚どて因じ きこ居をて あ步 寄 **2**23 影 だず乃 い不に欲昧 き對は な知は か完頂求の 大あ秒ひ でてらと °識至 るな °世萬 をし現 ら足云 食器具、 字は セ 活るを求 °全しし進 あくれは はろぬ探現 の人 らは ま々 宙去 悟渾在 カへへ 針 せかか究狀 の寧。せ充 かろ更よ實 なてて展る見滿の る不て理 1. F 動而取む このぬ ず勝 中が のり る身自 金 をもつる 續大て字 °斷溝想 か確 **°**實 ○の己 のた の完 姿而 と無か にへで もたたみ 3 3 "亞輕 努の ノ理も ボ鉛銀 植田 植 代町 議町 赤 好 好 夏 赤 磐工 田 年 井 間 井 0 井 水力電氣電氣株 理長 員會 物產株式會社 高尋 間 井 村 植 業株 金 小 矢 村 羽 Þ 職 第 金 Щ 賀 田 會 村 村 小 品品 有 式會 壆 議 小 M 員 校 長 志 校 長 廉 之部 賀 成 員 員 本 飲 社 成 賣に 崎 式 淸 會 勝 庄 莊 淺 政 社 忠 3 商 昇 通 橘 同 治 同 畧 區組消同同 同同 同 同 同議村 同同 同同 同 同同 同同 同 同 幹靑團靑 村 意 員會 ② 部團長年 長 〇 長 頭防 應 匹 木 島 大 根箱 渡 佐高 高 鈴 八佐 白 倉 村 占在價品 本 崎 川 谷 木 本 川部 萩 萩 本 邊 木代藤 土 木 製 **青**棒質 長 助 1豊最優 鐵 嘉 義正善 隆 田 民 **退富低良** 所 助郎吾治八 和 行 太 道 雄 郎 市 雄 郵 町 村 助 同 同 村 村 0 銅 倉職員 便 0 四 0 磐 萬 四 杉長 防 會 鈴議高長 本役 菅局 草野 城 町組 小 草通 鈴組 松 門會 高 城 長 運株 倉 人 運 瓦 野党 Ml 村 送倉庫 村 四 ŀ 波 倉 I. 行 電 原 株式 行 之部 業 氣 倉 DC 榮 倉 株 株 株 社組 淺 太 合 伍 源 武 治 郞 温泉旅館 溫泉旅館 町 湯本信用組合長 助 磐城梅岸軌道株式會社 0 ◎湯本町之部 支配 湯 磐城水產工業株式會社 小名濱町之部 桝 本 木 藝 屋 木 E 吳 話 屋 話 話 條 寬 Z 六三番 服

組

合

店

=

番

四

番 屋

吉

助

潔

問

平

紫 東式ベルト、圖産工具用鋼、スパイキコックを 一ルド、ナット、バルブ、湾、揚水卵筒、土木建築金具板、金庫、度量衡器、農工具打刄物、磐城セメント、ボースで、金庫、度量衡器、農工具打刄物、磐城セメント、ボー 銀系類 食器具 車銀銀山用電橋棚 銀鐵本 材配子 銀系類 食器具 車銀

營

確實敏捷は一人の生命な 良品廉賣に勝る商畧な V

回回回回回 現出在價品 金荷庫格質 取迅豐最優別速富低良 金和物洋 問 銅



来東京一

屋 一一九五六番

番

(E)	· 」:(號·八小第)自	6 W 7	日七十月一年二和昭
平町公私立學校長 話 會	入山採炭礦株式會社 整城炭礦株式會社 古河鑛業株式會社 古河鑛業株式會社	郡 第二區 小學校長會 常二區 小學校長會	年賀 飲 豐
分團長 伊 藤 秀 彌飯野村北山土	磐 赤 烷 張 小	本町字田町 本町字田町 高 久 病 高 久 病 高 久 病 高 久 病 高 人 病 一 三 五番 一 三 五番	電話五一八 理物株式會 一次 一次 一次 一次 一次 一次 一次 一次 一次 一次 一次 一次 一次
大 電話十三番 一 屋	平町實費病院 平町實費病院	中 五 丁 目 平 町 五 丁 目 平 町 五 丁 目 平 町 五 丁 目 平 町 五 丁 目	佐川洋服店營業所常磐線平町三丁目營業所常磐線平町三丁目營業所常磐線平町三丁目 電話「呼」六二番 電話「呼」六二番 電話「四」一八番 電話「四」一八番 電話「四」一八番 電話「四」一八番 電話四」番電路 乗刹 強料 進料 振替仙臺六五一六番 銀替仙臺六五一六番 無替仙臺六五一六番
m	日本石油株式會社特約店 日本石油株式會社特約店 日本石油株式會社特約店 度量 衡器)石油 乳劑平 二丁目	町三丁目 町四丁目 電話 {營業用 三五九 電話 { 気 県 九 家 具 上 三九 大 音 堂 看 板 上	和洋葉子商和洋葉子商 和洋葉子商 四丁目 配合長 大谷 八藏 四丁目 町 時 計 店 二二 二
電 話四〇一番 田 月 吳 服 店平町關ノ上	平町組屋町 電話四六〇番 電話四六〇番	一丁目を対本商をおよう。	和洋製菓問屋 一
株式會社	全	育本金元000000000000000000000000000000000000	信見 〒 そ 田 電 平 料 對信 電 所 町 理